

無名草子の清少納言評言私注

Comments on the Critique of 'Mumyoh Zohshi' by Seishoh Nagon

鈴木弘道

無名草子の注釈については、従来、主な単行本として、富倉徳次郎博士著『無名草子新註』（著者名は「富倉二郎」とある。）『昭和』校註無名草子』『無名草子評解』、拙著『校註無名草子』、北川忠彦氏担当『無名草子』（日本思想大系23『古代中世芸術論』所収）、山岸徳平博士著『無名草子』（角川文庫）、桑原博史氏著『無名草子』（新潮日本古典集成）などがあり、無名草子の一部分を対象とした注釈に、峯村文人博士著『方丈記・無名抄・無名草子』（学燈文庫）、拙稿「無名草子の平安末期物語評言」（拙著『平安末期物語論』所収）、片岡利博氏「無名草子注釈——女性評・その一——」（『文林』第十九号）などがあり、詳細なものは数少ない現状である。以下、清少納言評言につき、拙著『校註無名草子』の頭注を補足した詳注を試みよう。なお、無名草子は右の拙著を使用する。

○すべてあまりになりぬる人の、そのままにてはべるためし、ありがたきわざにこそあめれ。（八〇頁）

「あまりになりぬる人」は、あまりに程度を越して成り上ってしま

った人をいい、「そのままにてはべるためし、ありがたきわざにこそあめれ。」は、その成り上りのままの状態であります例は、珍しいことであるようだ。の意である。全体は、前章における小野小町の「美人流浪伝説」に関連して、あまりに時めく女性が晩年に零落することが少くないことを述べて、清少納言評言の序言としている。

○ひがき檜垣の子、清少納言は、一条院の位の御時、中の関白世をしらせたまひけるはじめ、皇后宮のときめかせたまふ盛りにさぶらひたまひて、人より優なるものとおぼしめされたりけるほどのことどもは、枕草子といふものにみづから書きあらはしてはべるめれば、こまかに申すにおよばず。（八〇頁）

「ひがき檜垣の子」は、拙著『校註無名草子』の底本とした彰考館文庫本に「ひかたのこ」とあるが、「ひかきのこ」の誤写なることは明白である。現に、池田亀鑑博士著『古典の批判的処置に関する研究 第二部 国文学に於ける文献批判の方法論』の「第十五章 日本古典作品に於ける本文転化の諸類型とその実例」には、群書類従本その他の無

名草子に「かきさして」とある文が彰考館蔵本に「かたさして」となっている実例をあげて、「き」(支)の草体が「た」(多)の草体に混同されやすいことが示されている(三九五頁)。しかし、「ひがきのこ」(檜垣の子)と読むべきか「ひがきのご」(檜垣の御)と読むべきかは問題であって、これには次の本文「清少納言は」との関係を考察する必要がある。

清少納言の父母については、つとに岸上慎二博士著『清少納言伝記攷』の中に詳細に考究されているので、それに従うと、まず清少納言の父は、清原元輔で(清原氏系図・清原系図など)、元輔は寛和二年(九八六)正月に肥後守として任地に赴き、永祚二年(九九〇)六月、八十三歳で没している(三十六人歌仙伝・大日本史 卷二百十九、歌人二)。また、清少納言の母については、岸上博士は群書類従本無名草子の清少納言評言のほとんど全文を掲げて(そこには「ひがきのご。せい少納言は、」とあり、「中の関白」は「宇治の関白」、「皇后宮」は「皇太后」とある)、次のように論じていられる。少し長くなるが特に重要と思われる部分を掲げよう。

無名草子の記事中にはひかきのごせい少納言の記事の外に少くとも二箇の難点が存在してゐる。その一は「一条院のくらゐの御とき宇治の関白よをしらせたまひけるはじめ」であり、その二は「皇太后のときめかせ給ふ盛りにさぶらひて」の箇所である。一条天皇の御在世中、政治をとり行つた者は、法興院東三条兼家、中関白道隆、粟田関白道兼及び御堂関白の四人のみで、宇治の関白と称される人はゐないのである。又、皇太后のときめかれた

時、清少納言がそこに宮仕へした事があるであらうか。かくの如く二箇所に亘つて本文に疑問があるが、しかしその次に、関白殿うせたまひとあり、又うちのおとどの流され給ひとある(鈴木注、後節に見える)。ので、この第一の疑問点宇治の関白は中関白とあるべき誤記と推考せられる。右のやうに誤記されるに至つた経路は、中関白が、うちの関白とよまれ、それが濁点をもち、更に漢字を以て宇治関白と書かれるに至つたのではないかと思はれる。第二の疑問点皇太后は、(二)の誤記が生じてから、宇治関白が政治をとられた時は、彰子が既に皇太后の位につかれてゐたので、自然にか、或は意識的にか皇后とあつたところを太の字の補入が行はれ皇太后と意識的に改められたのではあるまいか。

(一一七・一一八頁)

なお、「中の関白」を「宇治の関白」とする誤記の過程は、右の推定以外に、「中」の草体が「うし」と、かな二字に誤記される可能性も考えられないだろうか。岸上博士は、右に引続き、檜垣集、大和物語に見える檜垣の御の説話、後撰集の檜垣姫の歌を検討されて、無名草子において「ひがきのご」(檜垣の御)と句点で切つて読む説は、文章上から考えて不当とされた。そして、さらに、

檜垣集によれば檜垣姫と清少納言の父の元輔とは関係があるやうな記事が最も主要点でもあるから、清少納言が檜垣姫の子供であると云ふ伝説も生じてこようから、現存本無名草子の本文に拠るかぎりには「檜垣の子清少納言」と書いたものと考へるのが一番穏やかな理解ではなからうか。(中略)元輔が遠く肥後国へ下つた

とは考へられない時期に清少納言は生れてゐなければならぬことになり、檜垣姫の子供とは如何にしても考へられない。(二二二—二三三頁)

と述べられているが、いずれも納得し得る見解であり、今は伝説に従つて「ひがきのこ」(檜垣の子)と読んでおく。ちなみに、大和物語に「檜垣の御」、後撰集や檜垣姫集に「檜垣の姫」とあつて、無名草子では「檜垣」とするが、「御」は婦人の敬称、「姫」は老女の意で、三者は実質的に同一人物である。肥後国の遊女という説もあり、袋草紙上巻(日本歌学大系 第二卷所収)に、

肥。後。国。遊。君。檜。垣。姫。老。後。落。魄。者。也。(中略) 守何ぞと問ければ名高き檜垣也と人の云ひけるに、(五二頁。圈点筆者)

と見える。

「一条院」は、主として本朝皇胤紹運録によつて略記すると、円融院の皇子で、母は藤原兼家の二女、東三条院詮子。天元三年(九八〇)六月一日降誕。永観二年(九八四)八月二十七日、五歳で花山天皇の皇太子に立たれ、寛和二年(九八六)七月二十二日、七歳で即位(第六十六代)。その後、寛弘八年(一〇一一)六月十三日、三十二歳で讓位、同月十九日に出家(法名は精進覺)、同月二十二日に崩御された。

「中の関白」すなわち藤原道隆の官歴については、公卿補任の永観二年(九八四)の条より正暦六年(九九五)の条までの注記によつて略記すると、道隆は兼家の長男で、母は従四位上摂津守藤原中正の女。天曆七年(九五三)に出生。永延三年(九八九)二月二十三日、

三十七歳で内大臣に任ぜられ、永祚二年(九九〇)五月八日、三十八歳の時、内大臣のまま関白、同月二十六日、摂政となったが、正暦二年(九九一)七月十四日、三十九歳で内大臣を辞す。正暦四年(九九三)四月二十二日、四十一歳で摂政を辞して関白となり、長徳元年(九九五)四十三歳の時、病を得て、四月三日、関白を辞す。同月六日、出家入道を遂げて、同月十日、南院第において薨じた。したがつて、「中の関白世をしらせたまひけるはじめ、」すなわち、道隆が政權を握っていらつした初めのころ、といへば、道隆が関白となった永祚二年(九九〇)以降、関白を辞した長徳元年(九九五)までの初めのころ、つまり正暦年間(九九〇—九九四)の初めのころ、の意となる。「しらせ」の「しら」は、治めるという意の四段活用動詞「しる」の未然形。

「皇后宮」は、いうまでもなく一条天皇の皇后定子であり、定子については、すでに岸上博士が前掲著書において、主として『大日本史料』第二編之四の長保二年(一〇〇〇)十二月十六日の定子崩御の記事に基づき、詳細な年表を作成しておられる(二五二頁—二五九頁)ので、便宜上その主要記事を記すと、父は道隆、母は高階成忠の女、貴子。貞元年(九七六)に出生され、正暦元年(九九〇)正月二十五日、入内、同年二月十一日、女御、同年十月五日、中宮、長保二年(一〇〇〇)二月二十五日、皇后となられて、同年十二月十六日、二十五歳の若さで崩御された。その間、長徳元年(九九五)四月十日に父道隆が薨去、同二年(九九六)四月二十四日に兄弟の伊周・隆家が配流されるという悲しむべき事件があり、さらに長保元年(九九九)

十一月一日に道長の女彰子が入内して同月七日には女御となるという事態も生じた。したがって、「皇后宮の時めかせたまふ盛り」すなわち、中宮定子が一条天皇の御寵愛を一身に集めておられる栄華の盛りの時、といえば、まず正暦年間（九九〇―九九四）をさすと見ることができよう。

「さぶらひたまひて、」は「清少納言は、」に対する述語で、お仕えになって、の意。ところで、清少納言が定子のもとに宮仕えに上った年代については、最も代表的な研究として、岸上博士の前掲著書所収「清少納言の宮仕について」や田中重太郎先生著『枕冊子研究』所収「清少納言宮仕年代考」などに、旧説や詳細な考証が見られ、それによると、大体、正暦元年（九九〇）冬、同二年（九九一）冬、同三年（九九二）二月、同三年（九九二）、同四年（九九三）冬、その他、など多くの異説があるが、それらを批判された上で、岸上博士は正暦四年（九九三）初冬説を主張され、田中先生は、

清少納言枕冊子を資料として、その作者の初宮仕年時を考へる時、もつとも抵觸の少いのは、正暦四年初春であり、著者はこれを主張するものであるが、正暦元年（永祚二年）一、二月説、正暦三年二月説もあるいはかならずしもしりぞけることのできない理由があるやうにも思はれる。しかし、従来唱へられて来た正暦元年冬説、同二年冬（十二月）説、同三年冬（少くとも春にはなはだ近くでない頃）説、同四年冬説などは、それぞれいくつかの条件により、まづ従ふことができないのである。（八〇頁）

と結論された。この両者の説は、冬と春の相違はあっても、正暦四年

（九九三）という年は共通し、しかも、田中先生説によれば、正暦元年（九九〇）一、二月、正暦三年（九九二）二月も一応、捨て切れないうちである。したがって、「皇后宮のときめかせたまふ盛りにさぶらひて、」は、史実の通りであるが、正暦四年（九九三）宮仕え説に従うと、「中の関白世をしらせたまひけるはじめ、」の「はじめ」とはや矛盾する感がある。というのは、この「はじめ」とは、前述の通り「正暦年間（九九〇―九九四）の初めのころ。」の意となるからである。しかしながら、田中先生説の正暦元年（九九〇）一、二月や正暦三年（九九二）二月宮仕え説もあるから、これらを考慮すると先の矛盾も解消するわけであるが、仮りにこの宮仕え年代を取り上げなくても、清少納言の母を、事実と相違して單純に檜垣の御であるなどと誤記したり、後文に、清少納言の晩年における流浪伝説を事実のごとく記したりするほどの無名草子作者であるから、道隆の出世の初めともい得る永祚二年（九九〇）十一月、改元されて正暦元年）あたりを念頭においた結果、宮仕え年代の史実などは無視して、ただ漠然と「はじめ」という語を使用したのではないかと考えられよう。あるいは、当時、永祚二年（九九〇）・正暦三年（九九二）のころという言い伝えがあつて、それに依拠したことも想像される。

「人より優なるもの」は、他の女房たちよりすぐれているもの、の意。「おぼしめされたりける」は、次の二つの場合が考えられ、諸注は④を取っている。

④「れ」を受身の助動詞「る」の連用形と見て、清少納言が中宮定子からお思いになられていた、と解する。

⑧「れ」を尊敬の助動詞「る」の連用形と見て、中宮定子がお思
いになつていた、と解する。

今、試みに、無名草子における「おぼしめさる」の用例を探ると次の
ごとくである（圈点筆者）。

(1) 人人しくそのものなど語りきこえむ聞きどころありとおほしめ
さるべきものにはべらず。(五頁)

(2) ただ年の積りにはあはれにもをかしくもめづらしくもさまざま
おほしめされぬべきことを聞きつめてはべりしかど。(五頁)

(3) さばかりおほしめされたりし春宮にはさぶらひたまはず、(六
二頁)

(4) のちに御覧じけむ帝の御心地、まことにいかばかりかはあはれ
におほしめされけむ。(九〇頁)

これらの中で、(2)(4)の「おぼしめされ」の「れ」は尊敬の意を表わ
すが、(1)の「おぼしめさる」の「る」と、(3)の「おほしめされ」
の「れ」は、一応、尊敬の意と取れるが、受身の意とも考えられない
でもない。しかし、(2)の文は(1)に直結するから、(2)の「おぼしめさ
れ」の「れ」が尊敬の意であれば、(1)の「おほしめさる」の「る」も
必然的に尊敬の意と取るべきではあるまいか。かくて、無名草子の
「おぼしめさる」は、「おぼしめさ」プラス「る」の二重尊敬語と考え
るべき用例の方が「おぼしめさ」プラス受身の「る」と考えるべき用
例よりもやや数が多いといえそうである。しかし、ただ数が多いとい
う理由だけで、ただちに④よりも⑧の方が正鵠を得ているとはいいが
たく、結局、④⑧は両者とも誤りではないと見るべきではあるまい

か。

「枕草子といふものにみづから書きあらはしてはべるめれば、」とい
う実例は多数あげられるが、『無名草子評解』に、「第七十六段・第八
十七段・第八十八段・第六十三段・第二三三十五段・第二三十九
段（春曙抄本による）などに見える。」(二七三・二七四頁)とあるの
で、便宜上、これらの章段（岩波文庫本『枕草子』（池田亀鑑博士校
訂）の本文冒頭を掲げて、日本古典全書本『枕冊子』（田中重太郎先
生校註）に置き替えておく。

第七十六段 || 職の御曹司におはします頃、↓八十三段

第八十七段 || 五月の御精進のほど、↓九十五段

第八十八段 || 御かたぐ、君達、うへ人など↓九十七段

第六十三段 || 宮に初めて参りたる頃、↓百七十九段

第二三三十五段 || 男こそ猶いと有難く、↓二百五十二段

第二三三十九段 || 嬉しき物。↓二百六十段

○歌よみのかたこそ元輔が女にて、さばかりなりけるほどよりは
すぐれざりけるとかやとおほゆる。後拾遺などにもむげにすく
なう入りてはべるめり。みづからも思ひ知りて、申しこひて、
さやうのことにはまじりはべらざりけるにや。さらではいとい
みじかりけるものにこそあれ。(八〇頁)

「歌よみのかた」は、和歌を詠むという方面、の意。次の「こそ」
は、文末の「おほゆる」で結ばれるべきであるが、「おほゆる」は連
体形であるから、正しくは「おほゆれ」と已然形であってほしいとこ

るである。「元輔」は、いうまでもなく「清原元輔」のことで、これについては前述の通り、岸上博士の前掲著書や『日本古典文学大辞典』第二巻の「清原元輔」の項（岸上博士担当）などに詳述されているので、それらによって略記しておこう。元輔は歌人清原深養父の孫（あるいは子）で、永祚二年（九九〇）六月没。八十三歳。天曆五年（九五二）十月、梨壺で大中臣能宣・源順・紀時文・坂上望城たち梨壺の五人の一人として、後撰集の撰集と万葉集の訓読に従う。家集に元輔集があり、三十六歌仙に入れられている。清少納言は、右のように当代歌壇の巨匠である人を父として持ちながら、歌を詠むことについてはすぐれていなかったらしい。それが「さばかり」以下の要旨で、「さばかりなりける」は、父元輔がそれほどの有名歌人であった、の意ではあるまいか。「後拾遺」は、第四番目の勅撰集、後拾遺和歌集二十巻で、撰者は藤原通俊。応徳三年（一〇八六）に奏覧された。「後拾遺などにもむげにすくなう入りてはべるめり。」とは、和歌を詠むという方面ではすぐれていなかった清少納言の歌は、後拾遺集などにもひどく少なく入っているようです。の意である。ところで、後拾遺集に入っている清少納言の歌数については、国学院校訂『校訂増補五十音引勅撰作者部類』『校註国歌大系新修作者部類』第二十三巻所収）『勅撰作者部類』（山岸徳平博士編『八代集全註』第三巻所収）などによってただちに検することができるが、これらによると、いずれも恋二に一首、雑二に一首、雑五に一首、と記されている。しかし、今、直接に後拾遺集（講談社学術文庫本〔藤本一恵博士全訳注〕）に当たると、次の二首しか入集されていない（同本所収「作者索引」、岩波

文庫本〔西下経一博士校訂〕所収「作者別索引」にも二首しか記されていない。すなわち雑二に、

大納言行成、物語などし
侍りけるに、内の御物忌
にこもればとていそぎ帰
りてつとめて、鳥の声に
もよほされてといひおこ
せて侍りければ、夜ふか
かりける鳥の声は、函谷
関のことにやといひにつ
かはしたりけるを、たち
かへり、これは逢坂の関
に侍りとあればよみ侍り
ける

清少納言

940 夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさじ
とあり、雑五には、

陸奥守則光、くら人にて
侍りける時、いもせなど
いひつけて、かたらひ侍
りけるに、里へ出でたら
んほどに、人々たづねん
にありかな告げそといひ
て里にまかりいで侍りけ

るを、人々せめて兎人^{せうと}なれば知るらんとあるはいかがすべきといひおこせて侍りける返りごとに、布^{ぬめ}をつつみてつかはしたりければ、則光心も得で、いかにせよとあるぞと、まうできて問ひ侍りければよめる 清少納言

1156 かづきするあまのありかをそかなりとゆめいふなとやめをくはせけん と見える。『勅撰作者部類』などに、恋二に一首と記すのは、おそらく、

清少納言、人にはしらせ
でたえぬ中にて侍りける
に、久しう音づれ侍らざ
りければ、よそよそにて
物などいひ侍りける、女
さしよりて、忘れにけり
などいひ侍りければよめ
る

707 わすれずよ又わすれずよかはらやのしたたく煙^{けぶり}したむせびつ

無名草子の清少納言評言私注

の詞書に「清少納言」とあるために、実際の詠者が一首前の706番の詠者、藤原実方朝臣であることに気づかないで、つい清少納言の歌として数えられたことによるのではあるまいか。『古代中世芸術論』を除く諸注は、いずれも「計三首入集」と説いているが、恋二にも一首と誤記している『勅撰作者部類』などとともに、「計二首入集」のように訂正されなければならない。後拾遺集には、和泉式部の歌六七首を最高として、相模の歌四〇首、赤染衛門の歌三二首、能因の歌三一首、伊勢大輔の歌二七首、などが入集されているから、それらと比較して、清少納言の歌二首というのはあまりにも数少なく、まさしく無名草子に記す通り「後拾遺などにもむげにすくなう」入集されているわけである。それでは何故にわざわざここに「後拾遺」が取りあげられたのであろうか、いささか考えておきたい。それには清少納言の現存詠歌数、後拾遺集の特色、無名草子の後拾遺集観、などを考慮すべきであろう。清少納言の現存詠歌数については、田中重太郎先生の「清少納言の歌」(『清少納言枕冊子研究』所収)に詳細に論じられていて、それによると、約六二首であって、後拾遺集が清少納言の歌の採られている歌集の最初の勅撰集であることがわかる(なお、この御論文を拝見して、右の後拾遺集恋二(七〇七)の一首が清少納言にあらざる藤原実方の詠歌なることをすでに指摘しておられることを知って驚くとともに、今さらながら田中先生の御慧眼に対して敬服する次第である。したがって、前述のくだくだしい愚考は、も早や不要の感がないでもないが、無名草子の詳注を記すにあたり、念のために、より詳細に言及したまでである)。次に、後拾遺集の一特色を表わす選歌

範囲について、岩波文庫本の西下経一博士による「解題」に、

本集は拾遺集に洩れた中頃のをかしき歌を集めたもので、其の年代は天曆の末から當時に至る十一代百三十年間である。古今・後撰兩集の作者は除いて梨壺の五人から始め、当時の新歌人を多く収め、尊耳卑目の弊に陥らぬやうに力めたと序文に記してゐる。

(三頁)

とあり、しかも「中頃」の一流歌人はむしろ女流歌人であつて、後拾遺集入集全歌人三二〇余名のうち約九〇名が女性である。また、無名草子には後拾遺集に触れている箇所が次のように見える。

後拾遺、よき歌どもはべるめり。『古き集どもよりはよし。』など申す人人はべれど、古今のまねはいかでかしはべらむ。(七四頁)

これによると、無名草子作者は古今集を高く評価しているものの、後拾遺集の価値をも十分に認めていることが首肯されるのである。かくて、後拾遺集は、清少納言の歌の採られている歌集の最初の勅撰集であつて、女流歌人の入集歌も多く、無名草子作者からもその価値を認められていたことよつて、ここに「後拾遺などにも」として取りあげられたものではないかと考えられるのである。

「みづからも思ひ知りて、」は、清少納言は自分自身でも、歌の才能に乏しいことについては、よく自覚していて、の意で、たとえば、日本古典全書本『枕冊子』(田中重太郎先生校註。以下、枕草子は本書を使用する。)の百五十三段「うらやましげなるもの」の段に、

手よく書き、歌よく詠みて、ものををりごとにもまづ取り出でらるる、うらやまし。(二六九頁)

とあつて、歌に堪能な人を羨んでいたことを述べているが、これよりも直さず彼女自身、歌に堪能でなかったことを自認していたことでもあろう。

「申しこひて、さやうのことにはまじりはべらざりけるにや。」は、中宮にお願ひ申し上げて、そういう歌を詠むべきことにはかかわらなかつたのでございましょうか。の意で、「にや」の次に「あらむ」が省略されている。「申しこひて、」は、中宮に「申しこひて、」の意であつて、新潮日本古典集成本に「(人々に)お願ひし」(一一〇頁)とあるのは、『無名草子評解』(二七四・二七五頁)にも引用されている『枕冊子』九十五段「五月の御精進のほど、」の段に見える文から考へて妥当でなく、また、この文には、清少納言が詠歌を敬遠し、中宮から「今後、歌をよめというまい」といわれて安心したことが記されているから、無名草子作者の「にや」という推量は当たつているといえるであらう。「さらではいといみじかりけるものにこそあれ。」は、そうでなくては、あれほどの名歌人の娘としては、後拾遺集入集歌の数があまりにも少なすぎたものである。の意で、「いみじかりける」は「いみじく少なかりける」のことである。

○その枕草子こそ心のほど見えて、いとをかしうはべれ。さばかりをかしくも、あはれにも、いみじくも、めでたくもあることども、残らず書きしるしたる中に、宮のめでたくさかりにときめかせたまひしことばかりを、身の毛も立つばかり書き出でて(八〇・八一頁)

「心のほど」は、清少納言の心情の程度のこと。「をかしうはべれ。」は、興味深いものです。の意。枕草子が「をかし」を基調とする文学作品であることは周知の通りで、無名草子作者も同様に評価しているわけである。「さばかり……書きしるしたる中に、「は、あれほど興味深くもあり、しみじみとしたおもむきもあり、すばらしくもあり、美しくもあることごとを、残らず書き記している中に、の意。枕草子に見える形容詞「をかし」「いみじ」「めでたし」などの用例数については、田中先生著『清少納言枕冊子研究』所収「枕冊子（能因本・三卷本）形容詞一覽表」があって、それによると、「をかし」は能因本に四三九用例、三卷本に四一九用例あり、いずれも順位1、「いみじ」は能因本に三二〇用例、三卷本に三二三用例あり、いずれも順位2、「めでたし」は能因本に二一九用例、三卷本に一四一用例あり、いずれも順位5、となっているが、特に「をかし」については、田中先生は、

この冊子の形容詞の用例数は、（中略）かりにこれを約三千五百例とみても、その約十二パーセントを占める「をかし」の位置は、あまりにも強大である。（二八四頁）

と説かれている。なお、この計算に従うならば、「いみじ」は約九パーセント、「めでたし」は、約三パーセントを占めることになる。ただ、「あはれに」は形容動詞であるから、すぐには統計的処理ができないが、田中先生編著『校本枕冊子 総索引 第一部』によって「あはれなり」の用例数を調査すると、六八用例あり、これも決して少くはない。したがって、無名草子作者の枕草子観はきわめて妥当と評する

ことができるであろう。

「宮のめでたくさかりに……書き出でて、」は、中宮定子が立派に栄えて一条天皇の御寵愛を受けていらっしやったことばかりを、身の毛も立つほどに恐ろしくてぞっとするくらいにまさまざと書き出しているにもかかわらず、の意。「宮」は先の「皇后宮」で、中宮定子をさす。前述のごとく、中宮定子が一条天皇の御寵愛を受けていらっしやった栄華の盛りの時とは、大体、正暦年間（九九〇—九九四）で、その間のことを枕草子に「身の毛も立つばかり書」き出でたる章段とは、たとえば百段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどのことなど、」の段、百七十九段「宮にはじめてまゐりたるころ、」の段、二百六十二段「関白殿、二月二十一日に法興院の積善寺といふ御堂にて」の段などがあげられる。日本古典全書本『枕冊子』所収「年表」によると、百段は、長徳元年（九九五。二月二十二日改元）二月十七・十八日の記事で、十八日には、中宮定子が東宮女御原子と登華殿で対面されている。その中には、中宮定子を讃嘆する場面として、

(A) 「中宮サマハ」ただいとぞめでたく見えさせたまふ。「中宮サマガ」たてまつる御衣の色ことに、やがて御かたちのにほひあはせたまふぞ、なほことよき人（淑景舎）もかうやおはしますらむとぞゆかしき。（二二〇頁）

(B) 淑景舎のいとうつくしげに絵にかいたるやうにてゐさせたまへるに、宮はいとやすらかにいますこしおとなびさせたまへる御けしきの、紅の御衣にひかりあはせたまへる、なほたぐひはいかでかとお見えさせたまふ。（二二〇・二二二頁）

などがあり、ほかにも散見する。百七十九段は、正暦四年（九九三）清少納言初出仕の記事で、何かと恥ずかしく思う清少納言が、美しい立派な中宮定子を讃え、

(A) いとつめたきころなれば、「中宮サマガ袖ヨリ」さし出でさせたまへる御手のはつかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるはかぎりなくめでたしと、見知らぬ里人ごこちには、かかる人こそは世におはしましけれと、おどろかるるまでぞまもりまゐらする。(一九二頁)

(B) 宮は、白き御衣どもに紅の唐綾をぞ上にたてまつりたる。御髪のかからせたまへるなど、絵にかきたるをこそかかるとは見しに、うつつにはまだ知らぬを、夢のこちぞする。(一九四頁)

などに見える。二百六十二段は、正暦五年（九九四）二月の積善寺供養の記事で、ところどころに中宮定子に対する讃嘆の内容が見られ、次の文もまたその一例である。

この車ども（『私タチ中宮女房ノ車』の二十立てならべたるもまた「女院ノ方カラム」をかしと見るらむかし。（中略）いまぞ「中宮サマノ」御興出でさせたまふ。めでたしと見たてまつりつる「女院ノ」御ありさまには、これ（『中宮サマノ御行列』、はた、くらぶべからざりけり。朝日のはなばなとさしあがるほどに、水葱の花いときはやかにかがやきて、御興の帷子の色つやなどのきよらささへぞいみじき。（三二九・三七〇頁）

○ 関白殿失せさせたまひ、内の大臣流されたまひなどせしほどのおとろへをば、かけてもいひ出でぬほどのいみじき心ばせなり
けむ人の（八一頁）

「関白殿」は中の関白藤原道隆のことで、その薨じたのは、前述のごとく長徳元年（九九五）四月十日である。「内の大臣……おとろへ」は、「内の大臣」すなわち中宮定子の兄、内大臣藤原伊周が太宰権帥として配流されなざったりなどしたあたりの、道隆一家の没落のありさま、の意。伊周は、主として日本古典全書本『枕冊子』所収「年表」によると、正暦五年（九九四）八月二十八日内大臣となり、長徳元年（九九五）七月・八月以降、叔父道長と甚しく対立、同二年（九九六）一月十六日、伊周・隆家の従者が過って花山法皇を射奉る。同年四月二十四日、伊周・隆家配流の宣命が下り、五月一日・四日、それぞれ出発する。「かけても……なりけむ人の」は、枕草子の中に、少しもい出さないほどのすばらしいすぐれた心づかいであったとかいう清少納言でありながら、の意。事実、枕草子には道隆一家の没落に関する記事は見えず、たとえば、百三十八段に、

殿などのおはしまさで後、世のなかにこと出で来、さわがしうなりて、宮もまゐらせたまはず、（二五五頁）

（以下、清少納言の流浪伝説については、紙幅もなく、また、その一部はすでに拙著『無名草子論』にも記したので、省略する。）